

大正期の広島高等師範学校附属小学校に於ける算術科

木村 恵子

(受付 2021年5月31日)

1. はじめに

大正新教育運動は日本の教育の近代化に大きな影響を与えた教育改革運動である。この時期の日本の近代教育の推進に明治期の高等師範学校の果たした役割は大きい。中等教員の養成と普通教育の研究とを目指して明治35年に創立された広島高等師範学校は、東京高等師範学校に続く第二の高等師範学校として東京高等師範学校と並んで日本の普通教育をけん引する立場にあった代表的な教育研究機関である。2校の高等師範学校はそれぞれ著名な研究者を擁し東京と広島から教育情報を発信した。

『創立四十年史（広島文理科大学 広島高等師範学校）』（1982）の序文には国内の教育の実践及び教育をリードした自負が現れている。新しい教育理論の研究紹介だけでなく、明治38年には附属小中学校を併設し、教員の養成と普通教育の方法に関する研究によって、普通教育振興の中核としての役割を果たした。

小学校に目を転じると、大正新教育運動は子ども中心、生活中心の特徴を持っており、算術科の教育改善を求めた新教育実践の集積が生活算術運動と称されている。生活算術運動は全国的な数学教育改革運動なので、国立、私立の別なく各地に熱心な算術教育実践家が出現し、それぞれの生活算術実践を主張している。これらは指導的立場の実践家個人による実践研究の主張であり、従来個人の算術教育実践が集ったものとして生活算術運動はとらえられてきた。

しかしながら、広島高等師範学校を中心とする学園組織が行った教育研究と実践研究は、生活算術運動として理論的背景をもった実践研究を可能にしたのではないかと考えられる。広島高等師範学校教育研究会の沿革資料が現存しており、学校としての生活算術への取り組みの有無を含めて、理論と実践の様子を事例的に知ることができるのではないかと期待できる。筆者が第一の研究課題としているのは学校としての理論的研究と実践的研究との有り様を明らかにすることである。個人の指導的立場の実践家による主張にとどまったのか、あるいは、生活算術運動に関わる学校としての理論的、実践的な研究の取り組みがあったのかを明らかにすることは、生活算術運動がすでに学校における組織だった取り組みをも含んでいたことを検証することになる。第二の研究課題としているのは、広島高等師範学校教育研究会の活動から生活算術運動に与えた影響である。理論的、実践的教育情報が新教育に熱心な

算術教育実践家に影響を与えたことは想像に難くない。発信した内容と生活算術運動の全国的な動向とを比較することで課題について明らかにしたいと考えている。これは生活算術運動の理論的なバックグラウンドを考察する新たな手掛かりになるのではないかと期待できる。

広島高等師範学校附属小学校は、月刊誌『学校教育』や毎年開催する研究大会によって継続的に主張を発信している。広島高等師範学校に付属しているので学園として理論的背景をもって実践することが可能である。新教育に関する知識に触れる機会は多くあり、実践の研究を重視することが学園の方針である。したがって普通教育の場における生活算術運動の理論と実践への具体化の姿を見ることができると考えられる。加えて、生活算術運動期の小学校算術科としての向き合い方を追跡することのできる稀有な事例でもある。

以上 2 点の研究課題をもった研究の第一段階として、本稿は、広島高等師範学校教育研究会が大正 3 年に創刊した月刊誌『学校教育』を通して、広島高等師範学校附属小学校からどのような算数科に関わる情報が発信されたかを概観し、広島高等師範学校附属小学校の研究に関する動向を明らかにしたいと考えている。

2. 広島高等師範学校と『学校教育』の創刊

日清戦争後、小学校教員を養成する師範学校が多くつくられたが、更に高等普通教育機関としての中学校と高等女学校にも進学するものが増えたために中等学校の有資格教員が不足したことにより、広島高等師範学校が明治 35 年に文科・理科を置いて創設された。その後、昭和 4 年に広島文理科大学の付置校として広島文理科大学付置広島高等師範学校と名称を変更し、昭和 24 年広島大学広島高等師範学校と改称され、昭和 26 年に創立 50 年史を刊行後、翌昭和 27 年廃校、付属小・中学校をはじめ改称・改編されて昭和 24 年に設置された広島大学教育学部の母体となっている（広島文理科大学，広島高等師範学校，1942）。

広島高等師範学校は附属中・小学校で教育実習の現地指導と並んで、「教育者たる人格を陶冶し実力を涵養して、教育界の中かくたるべき人物を養成せんとするに外ならぬ。」（広島文理科大学，1942，p. 25）と述べているように、教育に対する高い見識をもった教員を養成する自負心と責任感を持っていた。このことは、明治 38 年 4 月に校友会組織の一部として教育・倫理・心理・哲学の研究を目的に倫理教育会を設けたことに現れている。この研究会は 9 月に教育研究会と名称を変更している。創立委員会によって決められた会則によると毎月一回の例会と大会をもつことが決められている。初代会長は広島高等師範学校校長北條時敏である。月一回の例会や大会などでの講演を集めた『教育研究会講演集』を年に一回の割合で明治 39 年から大正 2 年まで 7 号にわたって発行している。明治 39 年には、附属中学校と附属小学校の新校舎ができて、研究と実践が本格化した。大正 2 年には年 1 回の講演会集を廃刊と

し、翌大正3年に教育研究会編纂月刊誌『学校教育』を創刊している。大正期には明治期より活発に主張を発信するようになっていたことを表している。この『学校教育』が今日まで引き継がれている。

教科の指導原理や指導方法については、明治40年に教科目研究会を組織して高等師範学校と附属学校の各教科目と一般普通科目各教科目について教授上の原理と実際に関する全てを研究対象とし、修身教育科・国語漢文科・外国語科・地理歴史科・数学科・博物科・物理化学科・図画手工科・唱歌科・体操科各科に研究会を設けて月一回の集会を開催して研究を進めた（広島文理科大学，1942，p. 37）。このように明治後期より研究対象として各教科の原理と実践について定例の研究会をもった上で、『学校教育』創刊の大正3年を迎えている。この頃には広島高等師範学校を中核とする学園の普通教育研究の促進について次のように述べられている。

即ち大正三年一月我が教育研究会が月刊雑誌「学校教育」を創刊し、時代の新思潮新傾向を取り入れ、我が国における普通教育の刷新向上に資したことは其の一であり、更に大正四年五月我が附属小学校が小学校研究大会を創始し、爾来定例行事として年々之を開催し、初等教育の改善向上に貢献したことは其の二であり、又大正四年十一月、大正天皇の即位大礼を記念し賜らんが爲、教育博物館を開設し、広く教育に関する諸般の研究をなすと共に、其の成果を発表するに至ったことは其の三であり、或は又大正九年二月、時恰も世界大戦直後経済恐慌の影響を受け、国民の生活難が訴へられつつある折柄、福島、長田両教授を中心としてペスタロッター運動創始せられ、祖国教育の爲に一切を捧げつくしたペスタロッターの教育精神を、我が教育界に宣布するに至った事は其の四である。而して此のペスタロッター運動は、爾来益々盛大を加へ、我が学園の教育精神史に広く我が国の教育精神を純化長養して以て今日に及んで居る。

（広島文理科大学，1942，pp. 29-30）

研究と実績を公表するための例会や大会を開催していた学園が、特色ある教育運動として5項目をあげているうちの第一が月刊誌『学校教育』である。新思潮新傾向を取り入れたことが述べられており、普通教育の普及発展に研究した結果を公表したことを主張している。大正4年以降毎年開催される小学校教育研究大会の定例開催が特色ある教育活動の第二にあげられている。『学校教育』の臨時特集号は大会記念号として各教科における研究実績の報告を公表している。大正8年から学園の大学昇格を目指した教育活動の中で提唱した普通教育推進運動の過程で、大正9年中等教育研究会を発足させ、中等教育の理論及び方法の研究改善に取り組むことになった。同じく大正9年に附属小学校では、従来の小学校教育研究大会

を初等教育研究発表講演会として第一回を開催し、各教科の研究発表とともに初等教育の改善振興を目指した（広島文理科大学，1942，pp. 30-32）。大正 9 年からは初等教育と中等教育に研究会を分けてそれぞれ研究と実績を対外的に発信することになったのである。

本稿では、大正期の『学校教育』から広島高等師範学校における新教育の算術科での主張をとらえたいと考えている。そこで、『学校教育』を検討するにあたり発行元である教育研究会と『学校教育』の創刊について次節で概観したい。議論の時系列上、明治時代の教育研究会創設から概観する。

3. 広島高等師範学校教育研究会と『学校教育』

教育研究会は、前述したように広島高等師範学校が明治38年4月に校友会の一部として、教育・倫理・心理・哲学等に関する研究を目的として設立された倫理研究会が始まりである。校友会に属している会だが、広島高等師範学校の校友以外にも客員として会に属することを認めている。毎月一回の例会を開くが、大会を開いた折は月例会に代えることが会則に記されている。

大正3年の『学校教育』第1号には、雑纂の項に「広島高等師範学校教育研究会沿革」の記事がある。沿革によると、教育研究会を設立した明治38年の9月に第一回講演会と発会式、10月に第二回講演会、11月に第三回講演会、翌明治39年1月に第四回講演会と第一回大会、3月に第五回講演会を実施している。明治38年度の活動内容は教育研究会講演集第一輯として発行されている。活動の内容を知るために研究会が創設された明治38年9月から翌3月までの講演会で取り上げられた題目を表1に示す（表1）。

研究会発足の9月以来、年度末の3月までの7か月のうち研究会月例会に代えて講演会をもっている月は12月、2月を除いた5回である。講演会の講演題目を見ると、研究会設立の目的にあるように教育・倫理・心理・哲学に関して、特に教育をとらえる概念に関係したもや教育のバックグラウンドになったりするような内容のものが、講演題目として選ばれている。教育研究会の創設当時は、理論的な内容を学ぶことや話題を共有することに主眼が置かれていたと考えられる。演題を見ると、経済的教授や中学教育などどのように捉えるかをまず規定しようとする意図が見られる。教科や指導法以前に教育の概念を論じる必要があるととらえていた時期だったと考えられる。

明治39年度からの講演会内容を見ると、明治40年の5月の第9回講演会で特別会員大島鍵治による「理科教授」の講演題目が見られる。教科名が初めて講演題目に出ている。その後、明治41年1月の講演会では、特別会員長谷川乙彦による「中学校の修身科に就て」がある。話題の中心は中学校教育についてである。初等教育は明治42年度5月特別会員長屋順耳によ

表1 教育研究会の明治38年度講演会題目

年	月	講演会	講演題目	特別会員	通常会員
明治 38 年度	9	1 (兼発表会式)	実験教育学に就きて	塚原政次	
			近世心理学に於ける意思論	西管一郎	
			今後の教育主義		宮武俊彦
	10	2	社会進化の至義	小林郁	
			名誉		表甚六
	11	3	ゲーテの教育主義	春山昨樹	
			社会主義に就きて		勝山信司
	1	4 (第一回大会)	孟子の性論		榮先繁次郎
			山鹿素行の武士道		桐谷岩次郎
			教育主義に就て		北條時敬 (会長)
			教育の本義	広瀬為四郎	
			中学校の教育に就て	長谷川乙彦	
			趣味の教育	小西重直	
	3	5	経済的教授		田中米蔵
			個性の研究	塚原政次	
	中学教育に就て		渡邊辰次		

(教育研究会, 1914, pp. 80-81)

る「英国に於ける初等教育」が最初である。この年には特別会員田中好賢の「家庭と学校との連絡に就て」、広島高等師範学校校長で教育研究会会長の北條時敬による「英国に於ける道徳教育」が提示されている。明治43年になると月例会を読書会に代えることもあり、5月の第一回読書会で研究科生森準三による「米国に於ける教育の新傾向」など4本の題目が出されている。10月の第5回大会では教科教授の研究が提示され、特別会員金子一郎により「小学校に於ける算術教育について」を始め、綴方教授、図画教授などが提案されている。次第に、普通教育の研究に混じって実践の研究が出てくるようになったことから、実践を視野にいたったものが教育研究会の対象とする実践研究として価値を認められた時期ではないかと考えられる。

刊行物としての講演会集は、明治38年から明治39年度末講演会集第2輯、40年度末講演会集第3輯、41年度末講演会集第4輯、42年度末講演会集第5輯と年度毎に講演集を発行している。その後、43年度分は44年度四月に第6輯を発行、44年度末と大正元年は講演集を発行せず、大正2年4月に講演集第7輯の発行をもって廃刊となる。教育研究会は教育研究会の構成員を当初から校友の推薦をうけた校友外にも広げており、結果として、多方面の識者を交えた講演会を毎月企画開催し、どん欲に知識を吸収し広く議論しようとした様子がうかがえる。明治40年代になると月例会に読書会が企画できる程、学内で高い見識をもった人材が

育成できている。その発展として教科教授を大会の発表題目に据える段階に進んでいるのは、実際の普通教育の場面で理念の具体化を図ろうとする姿勢の現れと言えるかもしれない。それでも、同時に理念的な講演題目を共存させているところは、教育をどのように捉えるのかを重視し続けている教育研究会の創設時からの理念の表れであり、特徴的である。

次に講演会集から月刊誌へと機関誌の形態を変えたことについて、『学校教育』に教育研究会がどのような役割を担わせようとしたのかについて次節で概観する。

4. 『学校教育』の創刊と概要

教育研究会が『学校教育』を創刊したのは大正3年1月1日である。創刊号の冒頭には発刊の辞があり、教育研究会の歩みとそれまでの講演集を廃刊にして『学校教育』を創刊する理由を次のように述べている。

我が教育研究会は、従来年一回講演集を発行し来りしが、今や明治の聖世を送りて、大正の照代を迎へ、教育界益々多事ならんとするに際し、其の組織を拡張し、我が校の主張活動と相表裏して、滋に月刊雑誌「学校教育」を発行し以て世に問ふ所あらんとす。抑々教育の研究は、最も着実を要し、徹底を要し、創作的なるを要す。然るに従来の教育は、動もすれば欧米の模倣に急にして、一時的の研究に流るるの嫌ありしが今や時勢の進むに従ひ漸く之に不満足を感じずるに至れり。我等が常に世界の進運に遅れざらんことを期し、最も着実にして、徹底せる、創作的研究を鼓吹せんとするもの聊か茲に見るところあればなり。

高等教育関係者は、中等教育の不完全を非難し、中等教育関係者は、初等教育の不十分を訴ふ。初等教育者は中等教育の要求を非教育的なりとし、中等教育者は、高等教育の要求を以て不当なりとす。是れ各々独立の立場より観て、幾多の生ける被教育者を犠牲に供し居るにあらざるか。近時高等中等の教育者が初等教育をも研究せんとし、初等教育者も亦中等以上の教育法を参考して、自己の教育法を改善せんとする傾向を表はし来れるは、誠に故ありと云ふべし。我等が初等普通教育及び高等普通教育を実際に研究し、この立場より、更に高等専門の教育をも考察せんとするは、茲に開拓すべき余地あるを信ずればなり。

近時社会教育、通俗教育、家庭教育、軍事教育、其の他各般の施設次第に隆盛整頓に赴けり。是等各種の教育は、普通教育を出発点とし、帰着点とし、互に保護し、助成すべきものなるに、其の間連絡を欠き、甚だしきは往々反目することあるに至る。我等が、初等普通教育及び高等普通教育の立場より、此等各種の教育をも講究せんとするは茲に

感ずるところあればなり。

我が教育研究会は、実にかくの如き見地に立ち、研究の結果を『学校教育』に発表せんとす。其の目的とする所、誠に大にして、其の力のこれに称はざらんことを恐ると雖も、深く時代の趨勢に感ずる所あり、永年の努力を期し、内は我が校本来の目的を發揚し、以て会員の自覚に資し、外は聊か我が教育界の爲に貢献する所あらんとす。

(広島高等師範学校教育研究会、1914、発刊の辞)

発刊の辞の第一は、明治期に月例会の内容をまとめて年一回出版していた講演会集を廃刊し、『学校教育』を創刊する理由である。新しい時代に教育研究会組織の拡張と共に教育研究会の主張を積極的に発信しようとして月刊誌を刊行することが述べられている。明治時代の月1回の例会年1回の出版にとどまらず、自分たちの意見を対外的に発信し続ける必要を生まれたものと考えられる。第二は活動の立場である。海外の模倣でなく、世界の研究に後れを取らず、着実に創作的研究をすることを掲げている。第一で掲げた発信する内容についての方向性を述べたところである。第三に学校教育の接続を念頭に、異なった校種間でも相互の教育法を学ぶなど、接続校種間で互いの教育法などを尊重することによって学校教育の改善を図ることを呼び掛けている。特筆すべきは、接続校種には高等師範学校も含まれていることである。実践的な初等教育の授業改善研究が高等教育の授業改善研究の視点になるととらえている。第四に、特定の学校に対する教育でなく普通教育を出発点にし、帰着点とするような教育研究を重ねることが述べられている。高等師範学校は普通教育の振興に資するという理念は、学校教育は普通教育であると明確な主張になっている。第五は教育研究会の活動である。研究成果を『学校教育』に発表することで、教育界に資するようにすることである。教育研究会が研究のために研究するのではなく、特定の児童生徒のみを対象にした教育を目指していたのではないこと、広く普通教育の拡充と改善を目的としていたこと、明治期以来海外の教育に関する研究動向の紹介をしていたように大正期もその継続を図ること、それだけでなく、その上で創作的実践的な研究をしようとしていたこと、月刊誌『学校教育』が研究の発表の場であるとともに、意見の発信の場として企画されていることが明確な主張である。

次に『学校教育』に記載された記事の傾向について、第二・第三に述べられた海外を含めた研究の紹介と知見の発信に関する記事、第三と第四に関係する学校教育における教育法や校種に関わる記事に分けて整理する。

5. 『学校教育』における記事の構成と傾向

『学校教育』は、口絵、論説、研究、海外教育、雑輯、応答、新刊紹介、で構成されてい

表 2 『学校教育』の構成を示すタイトル

1号～12号	口絵, 論説, 研究, 海外教育, 雑纂, 応答, 新刊紹介
13号～45号	口絵, 論説, 研究, 講話, 海外教育, 雑纂, 応答, 新刊紹介
45号～70号	口絵, 論説, 研究, 講話, 海外教育, 雑纂, 質疑応答, 新刊紹介
71号, 72号	口絵, 論説, 研究, 「特集」, 講話, 雑纂, 質疑応答, 新刊紹介, 付録
73号～77号	口絵, 論説, 研究, 「特集」や海外教育や講話, 雑纂, 応答, 新刊紹介, 付録
78号～88号	口絵, 論説, 研究, 「特集」や海外教育や講話, 雑纂, 応答, 紹介
89号～96号	口絵, 論説, 研究, 「特集」や海外教育や講話, 雑纂, 応答, 新刊紹介
97号～102号	口絵, 主張, 本欄, 雑纂
102号～	波線区切り (1 論説, 2 研究・主張, 3 講話・質問の答, 4 随想・その他, 5 新刊紹介)

(日本図書センター, 1989, pp. 1-154)

る。研究の次に講話が入ることもある。構成内容は多少変化しているが、論説、研究は共通して記載されている(表2)。

特集には、「児童の服装問題」「新学校令」「新教育の建設」のように一度だけの特集もあれば、「普通教育の振興」の様に複数回タイトルにあげている特集もある。また、71号からは海外教育情報は「特集」として扱われたり、雑纂として取り扱われたりしている。創刊号から読者との質疑応答の項を設けている。102号からはタイトルを付けることはなく、構成順はそれまでと変わらないが、波線で目次を仕切って項のタイトルに代えている。後述の表4では第1、第2、第3、第4として分類表に記した。

表2に見られるように『学校教育』創刊号から一貫して記載されている記事は論説、研究である。このことから論説と研究は『学校教育』の構成の基幹となっており、教育研究会の発信したい情報を記載した主要な主張部分である。加えて、97号からは主張の項もある。そこで、教育研究会の重視したことや主張を表している、論説、研究、講話、主張に記載された記事について1989年の『学校教育』目次集成に集録されている目次の記事題目、及び目次集成に集録がない部分で復刻版により確認できたものについて記事題目により分類整理した。

対象とした『学校教育』は、大正3年1月の第1号から大正15年12月の162号まで13年間分と、大正15年度に含まれる昭和2年1月～3月(163～165号)の3か月分である。年毎の集計として記載している。164号は1月25日に名家講演と会員発表・寄稿による臨時号を出した後、2月1日に同じ164号として月刊号を出している(表3)。分類に際して、「教育学・心理学・倫理学」などの理念・思想に関する記事と「実践的な学校教育に関わる教授、指導法、教材、児童」などの学校の指導に関する記事で分けている。その後、これらの中で算術・数学に関わる記事を抽出した。

表3の集計を見ると、学校教育の理念に関わる「教育学・心理学・倫理学」などと「実践的な学校教育に関わる教授、指導法、教材、児童」などの一方に記事が偏ることなく、どち

らの分類項目にも同数程度の記事数がある。教育研究会の活動内容が明治期には理念の学習とその知識の報告・啓蒙であったが、『学校教育』では、その知識の実践や活用を理念と同等に研究しようと考えていたことが明らかである。構成に示された論説、研究をみると論説には理念に関わる内容が多く、研究には実践的な学校教育に関わる内容が多い。この中で、さらに算術・数学関係の記事を見ると、大正9年以降はほぼ毎号算術・数学関係記事が記載されている。大正3年の数学関連記事は「中学校に於ける数学科」の3回連載記事である。大正5年は「数学と修養」、大正7年は「中学の算術科について」、その他、数学として抽出していない記事として、大正4年の講話「孔夫子の数学」がある。教育学として分類している。附属中学校数学科による「形式陶冶に関する最近の論争」の記事が大正12年に掲載されている。数学的思考方に深い関係がある記事題目なので形式陶冶として表3に記載している。

算数・数学関連では、算術以外をみると、大正7年までは中学校以上の数学についての記事があるが、大正8年以降は小学校の算術科に関する記事のみである。大正9年に中等教育研究会を発足させていることから中等教育について、発信の場を確保できたためと考えられる。

一方、算術についての記事数を見ると、創刊時から大正8年までは毎年10本前後の記事数で推移している。ほぼ毎月1回は算術関連の記事が記載されている状況である。大正12年までと大正13年とを比較すると算術の記事数が倍増している。大正12年は付属中学校数学科が

表3 『学校教育』大正年間の論説・研究・主張の記事分類

年号	号数	教育学・心理学・倫理学	指導法・教材・児童・教授	(算術)	(数学)	(形式陶冶)
大正3	1～12	48	64	10	3	
4	12～25	23	49	7		
5	26～37	40	61	9	1	
6	38～50	42	48	9		
7	51～64	45	53	8	1	
8	65～77	53	57	7		
9	78～90	54	52	11		
10	91～102	67	70	13		
11	103～114	50	51	11		
12	115～127	60	59	9		1
13	128～138	48	57	19		
14	139～150	55	45	24		
15	151～162	68	83	23		
昭和2	163～165	18	22	5	1	164号は臨時号と月例号

(日本図書センター, 1989, pp. 1-154)

形式陶冶に関する記事を発表している年である。中学校の数学に関わる記事の記載は大正 8 年以降なかった上にそれまでの数学に関わる記事と比べると異色である。大正 13 年以降算術記事の発信が頻繁に行われていることを勘案すると、大正 12 年を境にして算術科の研究活動が活発化した時期であることが表 3 から明らかである。昭和 2 年は 3 か月分だが、すでに算術記事 5 本を発表しており、前年と変わらない活動状況である。

次節では、算術・数学関連の記事タイトルから発信された内容を概観する。

6. 『学校教育』に記載された算術・数学関連の記事

『学校教育』創刊号から大正 15 年度末までに記載された算術・数学関連記事の題目を一覧にしたものが表 4 である（資料参照）。年、月、号数、分類された構成上の節名、題目、著者名を記載している。研究以外の節に入っていた記事は節名を記載している。記載のないものは研究の節に記載された記事である。号数が連続していないところは算術関係の記載記事がなかった月である。20号は臨時増刊されている。内容は第一回全国小学校教育研究大会の記録である。研究大会の記録号としての臨時増刊以外に、特集を組んでいる号がある。特集として冠されたのは、11号は人格的教育、36号は戦後の教育、49号は創作的教育、63号は国民精神の教養、66号は代用品の研究、76号は思想問題と教育、89号は新教育の建設、132号はカント研究、である。

記事の題目を概観すると、単発のタイトルでなく複数回の連載のものが多くある。また、学年を示して具体的な指導法を記載したものや、初年次や中学校など指導段階を限定したもの、創作的教育と算術教育のように特集の題目にしたがって算術教育をとらえたもの、教科書や入学試験などを扱ったものもある。附属小学校の算術科として学校に勤務している教員が関心をもつと思われる内容と、関心を向けるべき内容とを選択しているように見受けられる。新教育に関わる新教材の扱いとして函数観念や函数思想、グラフ、分数、実験・実測、作問、などの記事では実践的指導法が記載してある。函数観念の養成と函数思想の養成のように類似した用語でとらえ方の異なる題目が並んでいるのは興味深い。『学校教育』の構成と記載記事の選択から推察すると理念的な用語は区別されていると考えられる。附属小学校算術科として区別をしているのか、著者の主張を通して考察したいと考えている。

表 4 に記載しているように、『学校教育』にはほぼ毎号算術科関連記事がある。したがって、大正期の附属小学校の算術科の置かれた環境と実践な研究について、『学校教育』を通して学校としての継続的な研究を捉えることが可能であると考えられる。

7. 考 察

5節と6節で『学校教育』の創刊号から大正年間を分類整理した結果、次のことが明確になった。

第一に、理念と実際の両方が同程度主張されていたことである。記事の題目には理念的なもの実践的なものがほぼ同数あった。このことから、明治期の教育研究会の研究姿勢を継続した理念と学校における実際とのどちらも重視しており、どちらかに偏ることはなくバランスを重要視している点があげられる。第二に、算術を含めてどの教科の記事も一定数あり、教科の発信に関して大きな偏りはなかった。算術・数学関連の記事は毎月ではないが毎年10本前後が一定数発信されている。初期には数学科の関係記事もある。第三に、新教育の算術科への取り組みの主張を積極的に発信していることである。算術に関する記事は大正13年から倍増している。算術科の具体的な記事にあるように新教育運動の影響は早い段階からみられる。大正13年からより指導の実際に関連した実践的な記事を加えている。それまで以上に積極的に意見を主張しはじめたと考えられる。前年の大正12年には数学的な考え方に関わる理論的背景となる形式陶冶論争に関する論考を発表している。このことから、従来の数学そのものを論じる内容から数学の思考や学び方に関心をもって新教育運動の算術科への具体化を提案したものと考えられる。

8. お わ り に

本稿では、大正新教育運動の算術科の現れである生活算術運動の様相を知るために、普通教育の振興を目的として教育研究を行っていた広島高等師範学校教育研究会が刊行した月刊誌『学校教育』を概観した。広島高等師範学校設立時から月例会のまとめとして年1回の会誌を発行して教育の理念・思想を発信していた年会誌が、大正3年からは月刊の機関紙として広く教育研究会の主張を発信するツールとして機能していたこと、大正3年当初より理念と実践のどちらにも同じくらいの記事数があり、その中では算術関連記事が創刊号よりほぼ毎月掲載されていたことがわかった。これらのことから、『学校教育』は学校としての取り組みを知ることができるだけでなく、生活算術に関する主張も継続的にあったことを示している。

今後は、記載された記事の内容を整理検討しどのような主張が発信されたのかを明らかにしたいと考えている。

【引用・参考文献】

- 木下竹次 (1923), 『学習原論』, 日黒書院.
 教育ジャーナリズム史研究会 (1989), 『教育関係雑誌目次集成 第Ⅱ期・学校教育編 第9巻』, 日本図書センター.
 教育ジャーナリズム史研究会 (1989), 『教育関係雑誌目次集成 第Ⅱ期・学校教育編 第20巻』, 日本図書センター.
 教育研究会 (1923), 『学校教育』, 第126号, 實文館.
 教育研究会 (1923), 『学校教育』, 第127号, 實文館.
 広島文理科大学 (1942), [広島文理科大学・広島高等師範学校] 創立四十年史, 広島文理科大学.
 広島文理科大学・広島高等師範学校共編 (1982), 『創立四十年史 (広島文理科大学 広島高等師範学校)』, 日本教育史文献集成, 第一書房.
 広島高等師範学校 (1951), 『永懷 広島高等師範学校創立五十年史』, 共同印刷図書株式会社.
 広島高等師範学校創立八十周年記念事業会 (1982), 『追懷 広島高等師範学校創立八十周年記念』, 広島高等師範学校創立八十周年記念事業会.
 中野 光 (1998), 『大正自由教育の研究』, 教育名著選集⑥, 黎明書房.
 中野 光・高野源治・川口幸宏 (1998), 『児童の村小学校』, 教育名著選集③, 黎明書房.
 佐々木元太郎 (1986), 『数学教育学の研究』, 教育出版センター.

【資料】

表4 大正年間『学校教育』算術科・数学科の関連記事

年号	月	号数	節の題名	掲載記事題名	著者
T3	1	1		尋常科第四学年に於ける小数の基礎教授	木村仁止
	2	2		不詳	
	3	3		時間及時刻の制度 (一)	津山三郎
	3	3		新入学児童の算術教授 (一)	木村仁止
	4	4		時間及時刻の制度 (完)	津山三郎
	4	4		新入学児童の算術教授 (二)	木村仁止
	5	5	論説	中学校に於ける数学科について	高橋豊夫
	5	5		国定算術書の誤謬	津山三郎
	5	5		新入学児童の算術教授 (完)	木村仁止
	6	6	論説	中学校に於ける数学科について (完)	高橋豊夫
	8	8	論説	個別陶冶と一般陶冶	守内喜一郎
	9	9		応用問題の解法につきて	木村仁止
11	11		人格的教育と算術教授	木村仁止	
12	12	論説	我国中等学校に於ける数学教育に対する所感	波木井九十郎	
4	1	13		大正三年に於ける算術教授界の傾向	木村仁止
	2	14		不詳	
	3	15		算術教授と復習	木村仁止
	4	16		算術教科書活用的一生面	土屋耕一
	6	18		国定算術書に現れたる里程教材の研究	山本孫一
	7	19		算術科入学試験につきて	角 達介
	7	19		中等学校入学算術試験問題の研究	伊東七次

木村：大正期の広島高等師範学校附属小学校に於ける算術科

	7	20	協議	第一届全国小学校教育研究大会 第三部会 現行国定算術書の教材並其配列の適否如何	
	11	24		尋常小学珠算教授の研究 (その一)	木村仁止
	12	25		尋常小学珠算教授の研究 (其二) (完)	木村仁止
	12	25	講話	孔夫子の数学	松山直蔵
5	1	26		大正4年に於ける各科教授の傾向 (四) 算術教授界の傾向	木村仁止
	3	28	論説	数学と修養	波木井九十郎
	3	28		尋常科第一学年に於ける中心主義算術教授 (一)	伊東七次
	4	29		尋常科第一学年に於ける中心主義算術教授 (二) (完)	伊東七次
	5	30		国定算術書に於ける「時間」「暦」の教材研究	山本孫一
	6	31		尋常小学珠算教授の研究 (一)	木村仁止
	7	32		小学校珠算教授の研究 (二)	木村仁止
	8	33		小学校珠算教授の研究 (三) (完)	木村仁止
	10	35		掛算九九の取扱法 (一)	山本孫一
	12	37		掛算九九の取扱法 (二) (完)	山本孫一
		38		不詳	
6	2	39		村落適用算術教授の要領	山本孫一
	4	42		村落適用算術教授の要領 (二)	山本孫一
	6	44		村落適用算術教授の要領 (三)	山本孫一
	7	45		高等科に於ける比及比例の教授法について	相澤 剛
	8	46		村落適用算術教授の要領 (四) (完)	山本孫一
	10	48		尋常科第一・二学年に於ける算術科応用問題に就て	永島松治郎
	11	49		創作的教育と算術教育	渡邊豊市
	12	50		初学年児童算術教授上の諸問題	相澤 剛
7	1	51		算術教授法を論ず (寄書) (一)	青山一江
	3	55		将来の算術教授を斯く革めなん	山本孫一
	3	55		算術教授法を論ず (寄書)	青山一江
	4	56		中学の算術科に就いて	曾田梅太郎
	5	57		修正算術書の眼目と其の徹底方案	山本孫一
	5	57		算術教授法を論ず (三)	青山一江
	8	60		尋常科に於ける分数教授に就いて	相澤 剛
	10	62		修正算術書取扱上の質問に対して (一)	山本孫一
	12	64		修正算術書取扱上の質問に対して (二)	山本孫一
8	1	65		初学年算術教授上の直観的方便物	岡 房吉
	3	68		初学年の算術教授に於ける手指使用について	岡 房吉
	5	70		尋常三学年用修正算術書のよしあし (一)	山本孫一
	6	71		小学校令施行規則の改正と算術科	相澤 剛
	9	74		余の考案せる「コンパス」と新主義数学	曾田梅太郎
	12	77		応用問題解題力の陶冶について	中野恭一
9	1	78		算術教授の傾向に就いて	山本孫一
	2	79		再び応用問題解題力の陶冶に就いて	中野恭一
	3	80		尋常四学年用修正算術書の研究	山本孫一
	4	81		尋常四学年用修正算術書の研究 (二)	山本孫一
	5	83		尋四修正算術書応用問題の研究	中野恭一
	6	84		尋二児童の構成せる応用問題 (一)	岡 房吉
	6	84		高等三年算術教材の研究 (一)	藤原武夫

	7	85	高等三年算術教材の研究 (二)	藤原武夫
	7	85	尋二児童の構成せる応用問題 (二)	岡 房吉
	8	86	高三算術教材の研究 (三)	藤原武夫
	9	87	高等三年算術教材の研究 (四)	藤原武夫
		88	不詳	
	11	89	数としての計算よりも事実としての吟味	山本孫一
	12	90	幾何及代数を尋常科算術に導入したる経験	藤原武夫
10	1	91	算術教授上の最新傾向	中野恭一
	2	92	各児童の能力に応じたる算術教授	古場政喜
	3	93	幾何及代数を尋常科算術に導入したる経験 (二)	藤原武夫
	3	93	尋常五学年用修正算術書の研究 (一)	山本孫一
	4	94	尋常五年修正算術書の研究 (二)	山本孫一
	5	95	尋常五年用修正算術書の研究 (三)	山本孫一
	5	95	実験実測の方面より見たる算術教科書	古場政喜
	6	96	尋常五学年用修正算術書の研究 (四)	山本孫一
	7	97	加減応用問題の初歩教授に就いて	中野恭一
	8	98	小数の乗法に就いて	相澤 剛
	10	100	メートル法度量衡に就いて	相澤 剛
	11	101	算術の教授用具と学習用具	山本孫一
	12	102	算術の教授用具と学習用具	山本孫一
11	1	103	算術教授は進歩したるか	山本孫一
	2	104	命数法の公理的意義	小林佐平
	2	104	応用問題教授批判	中野恭一
	3	105	応用問題教授批判 (承前)	中野恭一
	4	106	修正尋六算術書の研究	附小算術研究部
	5	107	算術科学習と思考作用	古場政喜
	5	107	応用問題教授批判 (承前)	中野恭一
	7	109	算術問題の提出方法	山本孫一
	8	110	応用問題教授批判	中野恭一
	9	111	解題と実験・実測に就いての随感	松井和夫
	10	112	算術教材簡略説の断行を望む	山本孫一
	12	114	算術問題の提出と児童の作題	古場政喜
12	2	116	グラフ教授に就いて (其の一)	中野恭一
	3	117	低学年算術教授の要訣	山本孫一
	3	117	グラフ教授に就いて (其二)	中野恭一
	4	118	形式陶冶に関する最近の論争	附中数学研究会
	5	119	グラフ教授に就いて	中野恭一
	6	120	高一、修正算術書取扱上の私見	山本孫一
	6	120	「メートル法」実地と算術教授	古場政喜
	8	122	高一修正算術書取扱上の私見 (二)	山本孫一
	9	123	私の算術教授に対する反省	古場政喜
	9	123	高一修正算術書取扱上の私見 (三)	山本孫一
13	1	126	数字に於ける場所の価値	山本孫一
	3	128	実験実測に依る算術教授 (一)	新宮恒次郎
	3	128	初学年児童第一学期の算術教授に就いて	相澤 剛
	4	129	実験実測に依る算術教授 (二)	新宮恒次郎

木村：大正期の広島高等師範学校附属小学校に於ける算術科

	5	130		実験実測に依る算術教授（三）	新宮恒次郎
	5	130		高二、修正算術書を眺めて	山本孫一
	6	131		実験実測に依る算術教授（四）	新宮恒次郎
	7	133		実験実測に依る算術教授	新宮恒次郎
	7	133		グラフと比例教授	中野恭一
	8	134		実験実測に依る算術教授	新宮恒次郎
	8	134		グラフと比例教授	中野恭一
	8	134		面積・体積の教授と用具の活用（一）	古場政喜
	9	135		実験実測に依る算術教授（六）	新宮恒次郎
	9	135		面積・体積の教授と用具の活用（二）	古場政喜
	9	135		初学年児童第二学期の算術教授に就いて	相澤 剛
	10	136		レホーム、アリスメチックと我が國定算術書との比較	山本孫一
	11	137		実験実測に依る算術教授（八）	新宮恒次郎
	11	137		グラフ教授に就いて	角 達介
	11	137		レホーム、アリスメチックと我が國定算術書との比較（承前）	山本孫一
	12	138		実験実測に依る算術教授（九）	新宮恒次郎
14	1	139		実験実測と誤差	古場政喜
	2	140		実験実測に依る算術教授（十）	新宮恒次郎
	3	141		空間教授と其の用例	山本孫一
	3	141		実験実測に依る算術教授（前承）	新宮恒次郎
	3	141		実験実測に依る算術教授に関する一考察と其の実例	中野恭一
	4	142		算術教授に於ける児童作題論	古場政喜
	4	142		高二に於けるグラフ教授に就いて	松井和夫
	5	143		修正算術書に対する杞憂	山本孫一
	6	144		「函数思想の養成」に就いて	中野恭一
	7	145		尋常五・六年グラフ教材取扱者の注意	古場政喜
	7	145		学校数学論（上）	新宮恒次郎
	7	145	第3	東京高師附小の算術協議会傍聴記	中野恭一
	8	146		学校数学論（中）	新宮恒次郎
	8	146		尋常五・六年グラフ教材取扱者の注意	古場政喜
	8	146		空間的教材としての取扱	山本孫一
	9	147		算術科に於ける児童の作問に就いて（一）	中野恭一
	10	148		学校数学論（下）	新宮恒次郎
	10	148		代数的解法の導入に就いて	山本孫一
	10	148		算術科に於ける児童の作問に就いて（二）	中野恭一
	11	149		尋二メートル法教授の初歩	古場政喜
	12	150		大正14年の算術教育界を顧みて	中野恭一
	12	150		低学年に於ける算術諸問題	松井和夫
	12	150	第3	逆九々の質問に襲はれて	山本孫一
15	1	151		空間教材と事実在即しての思考	中野恭一
	1	151		誤れる算術教授の一面	松井和夫
	1	151	第3	要は問題の改造である	山本孫一
	1	151	第4	山本訓導の算術教授	松井生
	3	153		算術応用問題の改造に就いて	山本孫一
	4	154		尋三修正算術書を観て	中野恭一
	5	155		数ふることに依る尋一の算術	松井和夫

	5	155	尋二算術応用問題の改造に就て	山本孫一
	6	156	函数思想の養成と応用問題の解法指導	中野恭一
	7	157	分数教授と分数説明器	曾田梅太郎
	7	157	個性開発算術問題取扱ひの実際	古場政喜
	7	157	函数観念養成の実際に就きて	松井和夫
	7	157	尋二算術応用問題の改造に就て	山本孫一
	8	158	自覚としての問題意識 (寄書)	千葉命吉
	9	159	個性開発算術問題取扱ひの実際 (二)	古場政喜
	9	159	算術の学習と興味	松井和夫
	9	159	尋三, 算術応用問題の改造に就て	山本孫一
	10	160	数学実験の意義に就て	小林佐平
	11	161	掛算九々に就いて	松井和夫
	11	161	税制改革に伴うて修正を要する算術問題の調査	山本孫一
	12	162	発明発見物語	中野恭一
S2	1	163	算術問題解法指導の重要点	古場政喜
	1	163	尋二, 児童の解いた算術の問題	松井和夫
	1	163	尋三, 算術応用問題の改造に就いて	山本孫一
	1	163	発明発見物語 (承前)	中野恭一
	2	164	低学年に於ける算術学習の主眼	松井和夫
	2	164	初等数学教育に於けるラッグ・クラークの思潮 (上)	新宮恒次郎
	2	164	発明発見物語 (承前) 三	中野恭一
	3	165	尋四算術書の修正に就いて	中野恭一
	3	165	初等数学教育に於けるラッグ・クラークの思潮	新宮恒次郎

教育ジャーナリズム史研究会 (1989), pp. 1-154, 教育研究会 (1924) より筆者作成

Summary

The Study of 'SEIKATU SANJYUTU' on the primary school attached Hiroshima Higher Normal School during Taisho Era

Keiko Kimura

This study aims to investigate whether it is possible to identify the beginning and development of life-centered arithmetic in the Hiroshima Higher Normal School Education Research Group during the Taisho period (1912–1926). The Hiroshima Higher Normal School led the Taisho New Education initiative and worked on theoretical and practical research for the promotion of general education. The Department of Arithmetic within Taisho New Education was called “Life-Centered Arithmetic.” By reviewing the monthly magazine “*School Education*” published by the Hiroshima Higher Normal School Education Research Group in the Taisho period, we were able to obtain three points of suggestion for life-centered arithmetic. First, the Education Research Group is a monthly research group based on the research of education, psychology, ethics, and philosophy. “School Education” is created through adding practical assertions to the logical assertions of this research group. Philosophical assertions and practical assertions are asserted at the same time. Second, assertions relating to arithmetic education were issued almost every month. If considered from the time of publishing, it seems arithmetic education was asserted as a new education. Third, practical assertions in the Mathematics Department have doubled since 1924. It was around the same time that life-centered arithmetic became popular nationwide. From the above, it is possible to clarify the relationship between the philosophy of the new education of the Hiroshima Higher Normal School and the practice in the Mathematics Department by examining “School Education.” “School Education” can thus be compared with the life-centered arithmetic provided nationally.